他人が居る前では厳しいけど、2人きりになると途端に甘え始めるオペレーター。

棺祀師

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ツンとデレの割合が１：９９くらいになってます。

よろしくお願いします。

＊タイトル変更しました（２０２２／０４）

目次

チェン隊長の話 ―――― 1
チェン隊長の話その2 ―――― 8

チェン隊長の話

「居眠りとはいい度胸だな。」
「あぇ、」
静寂が支配していた部屋に、突如女性の怒気を孕んだ声が響いた。机に足を乗せ、読みかけの本を顔の上に置いたまま居眠りをしていた俺はその声で目を覚ます。慌てて本を閉じ、涎を袖口で雑に拭、姿勢を正して声がした方向を見ると、眉をひそめた紺色の髪の女性がこちらを睨みつけていた。
「げ、チェン。」
「”隊長”が抜けているぞ。貴様、本当にいい度胸をしているな。」
「……チェン、隊長。」
彼女の絶対零度の眼差しが俺を貫く。
完全に油断していた。カッコつけて大して理解もできてない数学の本を読んで見たは良いが、案の定意味が分からずものの数分で眠ってしまったらしい。
「あいつまた怒られてんぞ。」
「これで何度目だよ。」

俺のこの状況を見た、同じ部屋にいた隊員の話し声が聞こえて来る。
くそ、好き勝手に言いやがって。
「ふん。おおかた、格好をつけて数学書（その本）を読んだは良いが、結局理解できずに寝てしまったという所だろう？」
エスパーかな？
「来い、根性を叩き直してやる。」
そう言うと俺は胸ぐらを掴まれ、部屋の外へと連れ出されて行く。俺より頭一つ分は小さい女性が引っ張っているとは思えない、とんでもない怪力になす術は無かった。
連れて行かれたのは彼女の執務室。道中でも、すれ違った隊員達が面白がって寄ってきたが、チェンが睨みつけると途端に蜘蛛の子を散らすように逃げていった。
彼女は執務室につくなり俺を押し入れ、部屋に鍵をかける。そしてキョロキョロと部屋を見渡したのち、先ほどとは打って変わって申し訳なさそうな表情でソワソワし始めた。
「さ、さっきはすまない。痛くなかったか？」
「え？ああ……。」
そう言いながら俺に寄ってきた彼女は、さながら夫のネクタイを直す妻のように俺の乱れた襟元を直し始める。

「強引に連れてきてしまったな。でもどうしても2人きりになりたかったんだ。」
少し赤くなった顔を隠すように俯き、けれども手は止めずにそう言った。
「なら、普通に呼んでくれって。」
「す、すまない。でも、お前が居眠りしてたのも悪いんだぞ!全く。それに呼び捨てにして良いのは二人きりの時だけと言っただろう。これじゃあ他の隊員に示しが付かないぞ。」
「返す言葉もございません……。で、それで何の用なんだ?」
「あぁ、そうだな、それなんだが。」
用を聞いた途端、彼女は更に顔を赤くし俯いてしまう。口調もしどろもどろになり、声を発する決心がつかないのか口を閉じたり開いたりして妙に歯切れが悪い。
「チェン?」
「えーと、その、最近私はかなりの激務でな、行ったり来たりで寝れてもいなくて……とにかく、私は頑張ったんだ。」
「あぁ。」
そういえば確かにここ最近彼女の姿を見なかったし、目元をよく見ればうっすらと、本当にうっすらとだが隈もできているような気がするが、なぜ今この話を?イマイチ話の先が読めず困惑してしまう。

「だから、お前からの褒美が欲しいんだ。」
「褒美？あぁ、わかった。今度飯でも奢るよ。」
「いや！そんな金銭的な物は望んでいないんだ！ただ、その、あ、」
「あ？」
「頭を撫でて欲しい……」
彼女は消え入りそうな声で、顔を真っ赤に染めてそう言った。いつものような凛々しい彼女ではない、まるで一人の少女のような振る舞いに思わず俺もドキリとしてしまう。
俺達がこんな関係になったのは1年ほど前だ。最初は冷酷無慈悲の鬼上司だった彼女だが、ある事をきっかけに彼女は俺に対して優しくなり、頻繁に話しかけてくるようになった。それからは少しずつ2人でいる時間が長くなり、今ではこうして暇さえあれば呼び出される始末。まぁ、俺も悪い気はしないからいいのだが。
「ダメ、か？」
彼女は胸元に手をやり、気配を窺うような上目遣いでそう言った。少し潤んだ真紅の瞳の奥には、同じく頬を染めた俺が写っている。
「そんな事でいいならいくらでも。」
正直、彼女の美貌でこんな頼み方をされたら男なら誰も断る事はできないだろう。手

を伸ばし、彼女の頭の上まで持っていく。

「ぁ、」

角のある種族は角が敏感だというから、そこには触れないよう気をつけながら撫で始める。

彼女の髪はさらさらで、高級な絹糸のように柔らかい。忙しい中でもしっかりと手入れされている事がわかる綺麗な髪だ。なるべくその髪を乱さぬよう、流れに沿って手を動かす。心地の良い肌触りに一生撫でていられるのではと思ってしまう。それは彼女も同じのようで、目を細めながらにへら、と脱力した表情を見せている。

「ど、どうだ？」

甘ったるくなっていく空気に耐えきれずにたまらずそう尋ねてしまうが、彼女はよほど心地が良いのか表情を崩したままで返事は返ってこなかった。

「……なぁ。」

それから数十分後、彼女はおもむろに口を開いた。

「もう一つだけ、わがままを言っても良いか？」

「ん？」

「少し、屈んでくれ。」

「分かった。」
俺が言う通りに屈んだのを見て彼女は微笑む。そうして俺の首の後ろに手を回し、グッと自身の顔へと引き寄せて行く。自身の視界が、彼女の顔で埋まる。ここからどうなるのかは明白だった。お互いが、そうであるのが当然かのように目蓋を閉じる。そして――
「チェン隊長！緊急事態です!!」
触れ合う直前、執務室の扉の向こうから焦った男の声が聞こえた。その声で俺とチェンは目を開き、慌てて距離を取る。男の声で冷静になった思考が、自身がつい数瞬前に行おうとしていた行為を理解して頬が赤くなる。彼女に至っては最早心配になる程に顔全体が真っ赤に染まっていた。
「ど、どうした!?」
彼女は平然を装って扉の向こうの男に返事をする。
「武装集団が街の運送会社を襲撃したとの通報が入りました！」
かなり深刻な事態だった。
彼女は恨めしそうに扉を睨みつけると、思いっきり蹴りつける。扉が扉としての機能を果たせなくなったことを告げる破砕音が響き、彼女が一言。
「行くぞ！騒ぎを起こした事を後悔させてやる!!」

その後、件の武装集団はこちらが同情してしまうほどにボッコボコにされたのちに連行されていった。

その場を目撃した隊員は口を揃えて「チェン隊長を怒らせてはならない」と言っていてたそうな。

チェン隊長の話その２

ある任務終了後、ホシグマに「サシで飲まないか。」と誘われた俺は彼女と共に街のバーに来ていた。

彼女から飲みに誘ってくる事は度々あったが２人きりというのは珍しいな、と思いながら隣に座る彼女の方を見る。彼女は何杯目かもわからない極東の酒を呑みながら満足そうな表情でこちらを見ていた。

俺はその視線にむず痒さを覚えながらも、自身のグラスに注がれた彼女のものと同じ酒を口に含む。独特な柔らかい甘い香りが鼻をついて広がり、アルコールが口内を焼く。

「それで、チェンとはどこまで行ったんだ?」

「ゴボッ!」

彼女が口を開いたかと思えば、とんでもない質問を飛ばしてきた。思わず口に含んでいた酒を吹き出してしまう。

「ゴホッ、ゴホッ、ど、どこまでってどういう意味だよ。」

「そのままの意味だよ。２人がのっぴきならない関係だという噂は隊の名物だぞ。」

「……。」

誰だそんな噂を流した奴はと憤慨しそうになるが、あながち否定しきれない所もある。あの日の執務室での出来事もそうだが、確かにただの上司部下にしては距離も近すぎるだろう。酔いのせいか、自身の頬が赤くなっていくのがわかる。

「それで、どうなんだ?」

「どうって、別にどこまでも行って無えよ。」

「なに?てっきり　＊龍門スラング＊　ぐらいは済ませているのかと思っていたが。」

「なッ!?ばっかお前!んなことしてたら今頃俺の首もアソコも飛んでるわ!」

思いがけない彼女の言葉により一層顔が赤くなっていく。

なんなんだこいつは。俺とチェンがそんなことなんてする訳ないだろう。

「いや、押してみれば案外満更でもないかもしれないぞ。」

「ないないないない。」

「だったら本人に聞いてみれば良い。なぁ?チェン殿?」

「は、」

ニヤニヤと悪戯な笑みを浮かべた彼女の視線は、俺を通り越した向こう側に向かっていた。つられて振り返ると、カウンターの一番奥の席に居る一人の女性を見ていたのだと分かった。

彼女は逆さまに持ったメニューで顔を隠しており、見覚えのある角だけがひょっこりと顔を見せていた。そして奇遇な事にうちの隊長と同じ近衛局の制服を着用していて、隊長と同じ髪色の二つに結えられた髪に、龍のトレードでもある鋭い角と黒い細い尾を持っている。

「って、あぁ!?」

俺の驚きの声に反応して、件の女性――チェンがビクッと肩を揺らす。

「ひ、人違いだ、です。」

「いやいやいやいやいや。」

「ハハハ。」

「ホシグマも笑ってんじゃねえよ！な～にがサシ飲みじゃ！」

「いや、本当にサシのつもりだったさ。チェンが居たのは偶々だよ。」

「はぁ?ちなみにいつから居たんだ?」

「確か私が酒を頼んだ辺りからだな。」

「最初からじゃねぇか……。」

ホシグマは相変わらず楽しそうにニヤニヤとしている。

「とりあえずチェン殿もこっちに来たらどうだ?」

「ひ、人違いですわ。」

「それがまだ通用すると思ってんの？あと口調。」
「……むぅ。」
チェンは顔を隠すのを止め、仕方ないかというふうに肩を竦めたあとにちょこちょこと隣の席へとやってきた。彼女は膝の上に握り拳を置き、不満そうに口を尖らせながらこちらを見ている。
「それで、チェン、隊長はどうしてここに？」
多少の気まずさを感じながら俺はそう尋ねる。
「何だ？私が居たら悪いのか？」
「いやそういう訳じゃないけど……。」
開き直ったチェンはかなり不機嫌な様子で、相変わらず口を尖らせたままでいる。何故そんな様子なのかが理解できず俺もどうしようか悩む。
「全く世話の焼ける奴らだ。ほら。」
ホシグマはそう言うと自身のグラスと酒瓶をチェンに差し出した。グラスには透き通った透明な酒が並々と注がれていた。飲め、ということだろう。
「なっ、私は別に――
「飲みに来たんだろう？それともまさか、私情で隊員のプライベートを覗き見しようとしたのか？」

「……ぐ、す、すまない。いただこう。」
「ったく、あんま飲みすぎるなよ？」

「らからぁ～、おまえとホシグマはどういう関係なんら～？」

「言わんこっちゃない……。」
俺は頭を抱えて項垂れる。
衰えることのないペースで酒を飲み続けたチェンは、短時間で出来上がっていた。ベロンベロンになった彼女は俺の首に腕を回し、抱きつきながら絡んでくる。
「こたえろ！隊長めいれいらぞ！」
「だからさっきから何度も言ってるけど！ただの同僚だって。」
「おい、別にチェンには誤魔化す必要は無いんだぞ？」
「うぅ～～!!」
「あーもう！ややこしくなるからホシグマはある事ない事言うな！それにチェンも飲み過ぎだぞ！」
チェンは俺とホシグマが2人で飲みに来た事が気に入らないようで、酔いはじめてからずっとこんな感じだった。ホシグマもホシグマで、チェンのこの様子を面白がってちょっかいをかけてくる為に収集のつかない状況になってしまっている。
「わたしがふたりをみかけたとき、すごく悲しかったんらぞぉ～～!!」
「あーはいはいわかったわかった。今度からチェンも誘うようにするから。」
「ちがう！ふたりきりで飲みにいくな！」
「えぇ？わ、わかったよ。」

正直変わらない気もするが彼女が大人しくなるのなら、と適当に肯定する。彼女は俺の返事を聞いて満足そうに微笑むと、俺の首に手を回したまま向かい合う形で俺の膝の上へと座ってきた。

「ちょ、チェン、流石に酔いすぎだって。」

「おまえはぁ、わたしのものらぁ。」

彼女はゆっくりと腕の力を強めて、身体を押しつけてくる。自身の胸元と柔らかい二つの感触がぶつかり、ムニムニと形を変えていくのが分かった。彼女は意識してやっているのかは分からないが、その感触は確かに俺の理性を削り取っていった。

「お、おい、ホシグマも見てないで何とかして――

たまらずホシグマに助けを求めるが、グラスを文鎮代わりに幾らかの龍門幣が置いてあるだけで隣には誰も居なかった。

「あの野郎いつの間に……。」

「おいっ、どこをみているっ。」

グイ、と手で顔をチェンの方へ向かせられ、あの執務室の時と同じく視界が彼女の顔で埋まった。

酒のせいで赤みを帯びた彼女の顔は艶かしさを醸し出していて、その美貌にドキリ、

と心臓が跳ね、思わず生唾を飲み込む。

彼女の熱く潤んだ双眸は俺を捉えて離さない。それは俺も同じで、彼女から目を逸すことができなかった。

互いの視線は甘く、乱雑に絡み合う。

「チェン――――

「あの時の続きだ。」

そう、ハッキリと彼女は言い、何かを期待するような瞳を見せ目蓋を閉じる。その仕草に、自身の自制心が音を立てて崩れていく。

ゆっくりと彼女の後頭部に手を添えて、今度は俺が、彼女の顔を自身の元へと近づけていく。抵抗は感じられず、身を委ねてくれているのが分かる。

そして――

「……ぐぅ。」

ぐぅ？

そんな変な呻き声で微かな冷静さを取り戻した俺は、顔を少しだけ離して彼女を見る。相変わらず目を瞑ったままの彼女は、とても綺麗だった。

それにしても、意識してみると彼女の身体に力がこもった様子が感じられ無い。最初は身を委ねてくれているのかと思ったが、もしかして、

「チ、チェン？」

返事は無い。スゥスゥと彼女の規則正しい呼吸音のみが聞こえて来る。

「だ、大丈夫か？おい？」

「んーにゅう。」

「嘘だろ？」

「……。」

「……寝てるんかい!!!!!」